

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401,044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第116号

新年、あけましておめでとうございます 本年もよろしく願い申しあげます

柿生郷土史料館 館長 財田信之

昨年のごあいさつで、「今年の干支は、酉年です。」とごあいさつをさせていただきましたが、その後、干支のことを調べていたら正確には干支ではなく、十二支と呼ぶことが正しいということがわかりました。十二支とは、12で一周する数の考え方で、年や方角、時刻に使われ、動物の名前をあてて親しみやすく、覚えやすいようにしたものです。一方の干支とは、十干(じっかん)と十二支(じゅうにし)を組み合わせた60で一周する数の数え方で、これも年や日付でつかわれていますが、魔除けとして赤いちゃんちゃんこ帽子を身に着け、60歳でお祝いする「還暦」(暦が還る)は、よく知られています。今まで、干支のことを気にしたことがありませんでしたが、この柿生文化のあいさつを書かせていただいたおかげで、新たなことを知るいい機会になりました。

今年(今年)は戌年です。戌は、刃物で農作物を刈り取りまとめる様子を表しており、滅につながる漢字で、草木などが枯れ果てる意味をもつ漢字だそうです。「滅びの意味になる干支」って少し不安になりますが、来年の「亥」(い)に草木の生命力が、種などの中にこめられ、その次の年の「子」(ね)に、この種から草木の芽が出るという意味の年につながっていくので、今年(今年)は、着実に力をためる年になるようにしたいものです。私も還暦を迎えますので、赤いハンカチをいつも持って、健康第一で、元気に過ごせるようにしたいと思いますので、本年もよろしく願いいたします。



シリーズ川崎の歴史を知ろう！

「川崎の文化財」-15

麻生区内における旧都筑郡地域の古代の様子を想像
 してみましよう(1) ～発掘された古代の遺跡から～

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員 栗田 一生

川崎市域における旧都筑郡内の遺跡ということで、これまで個々の遺跡について紹介をしてきました。今回からは、今までお話してきた麻生区内における旧都筑郡地域の遺跡の中で、古代(奈良時代、平安時代)の遺跡から発見された資料等をもとに、当時のこの地域の様子を想像していきたいと思えます。

701(大宝元)年の大宝律令により完成したとされる、天皇を中心とする中央集権的な古代律令国家体制において、全国には「国 - 郡 - 里(後に国 - 郡 - 郷)」という地方行政組織が置かれるとともに、それらの地方行政組織と中央(都)を結ぶ交通網も整備されました。古代律令国家が地方を支配する制度として設置した国や郡は、律令国家体制が事実上崩壊した10世紀以降、その行政的な機能は失われていきましたが、みなさんも御存知のように、近代初頭、一部では現在に至るまで、地域にとって欠かすことのできない行政的な地理区分として用いられています。(以下4ページに続く)

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

1月 7・14・21・28日(毎日曜日)

2月 3・10・17・24日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第86話

民間信仰 7 お稲荷様～稲荷信仰

小島 一也 (遺稿)

稲荷と言えば京都の伏見、愛知の豊川、茨木の笠間稲荷などが全国的に有名ですが、これは五穀の神(霊)崇拝の民俗信仰から起きたもので、この地方でも戦前まではどこの農家でも赤い鳥居に赤い小祠のお稲荷様が在り、毎年、節分(2月3日)を過ぎた最初の「丑うし」の日を「初午はつつま」と呼び、祠の前に、五色の紙を継ぎ合わせ、「正一位稲荷大明神」と大書してシノ竹で左右2旗吊るして、赤飯煮しめ、油揚げなどを供え、その年の五穀豊穰、家内安全を祈りましたが、そこには、狐の像が大切に祀られていました。

この小さなお稲荷さんを屋敷稲荷(現在もあり)と呼び、親族で祀る祠を一家(いつけ)稲荷。そして、村の神社や寺の末社、末寺に多くの稲荷社があり、その特徴は赤い鳥居、赤い社と、狐像が本尊として祀られていることです。お稲荷様の鳥居や祠が赤いのは、朱は高貴な宮殿を表す色で、豊かさ、豊穰を示すものとされ、狐像は一般的に狐はお稲荷様の化身とかお使いとか言われますが、稲荷とは前述の通り豊穰を願う「稲成り」から起きたものといひ、稲荷と狐との関係を、「稲荷信仰研究(五来重氏)」をお借りして大要を述べると、「キツネの古語は「ケ(食)ツネ(根本霊)」で、古事記では、食の根本神である女神「ケツネ姫」が死ぬと、体内から稲穂、蚕、粟、大豆、小豆が湧き出て、人間に五穀をもたらした租神(霊)と記されており、そこに一般的動物の「キツネ」が「ケツネ」の化身として霊獣化され、狐は玄妙、奇瑞を顕すものと、稲荷と狐は切り離せないもので、稲荷信仰の特色となっています。

この稲荷信仰は屋敷稲荷を別にして、多くの稲荷と名付く社や旧跡を残しています。新編武蔵風土記稿は文化年間(1816)編集された歴史書ですが、その頃、都筑郡下の村は63ヶ村、稲荷の名称は60余個所も記されており、麻生区内では、万福寺の笹子稲荷、栗木常念寺の稲荷2社、上麻生月読神社の境内稲荷、東林寺の白山明神稲荷、下麻生の稲荷八幡。王禅寺には寺の境内稲荷社と入口の稲荷森稲荷。早野には地頭林稲荷、岡上東光院には稲荷信仰の瘡瘡神社、細山には大久保谷戸鎮守の稲荷社、三崎稲荷社があり、これ等の社はそれぞれ異なった霊験を持ち、五穀・養蚕の豊穰から、疫病平癒、生業繁栄、家内安全と、寺社の境内に在っても固有の稲荷信仰によって建立されています。

新編武蔵風土記稿以外の稲荷社を見てみると、岡上には宝殿稲荷、開戸稲荷の2社があり、これは一族(イッケ)勧請の稲荷神社で宝殿稲荷は海老沢、星野イッケ。開戸稲荷は横田イッケのもので、ともに祭神は「稲倉魂命」で祠内に狐像を祀り、五穀豊穰、悪魔除け、家内安全の神としていました。今は岡上神社に合祀されています。上麻生の大ヶ谷戸には6尺ほどの参道に二つの朱の鳥居を持つ「瘡守(かさもり)稲荷」が今も存在しています。これは月読神社に合祀された熊野神社(現柿生駅前)の境内に在った瘡守稲荷を信仰する鈴木一族が現地(長福院西)に移したもので、祠内には白磯の白虎が多数祀られ、腫物や火傷に土の団子を供えたと治ると伝承され、今でも米の団子が供えられていることがあるそうです。



大ヶ谷戸の瘡守稲荷



祠内の白狐群

王禅寺琴平神社の東隣に、通称つんぼ稲荷とも称する「金子稲荷」があることをご存知でしょうか。これは当初文久元年(1861)地元の金子家が勧請した稲荷で、参詣すると無くし物、忘れ物が見つかる信仰され、信者は近郷近在に及び、毎年初午には「奉納正一位金子稲荷大明神」の高さ7~8m程の紅白の大幟が寄進され林立したものです。今は全くその幟は姿を消しており、祭主の金子さんに聞くと、宅地化で長い旗竿の保管が困難で文久年間以来の幟旗は自宅に保存しており、今でもお詣りする信者があるそうです。



金子稲荷



初午の幟

広い羽田空港の飛行の障害とも思われるところに立つ朱の大鳥居、穴守稲荷には狐の穴があったそうです。それが空の安全を願うパイロットや乗客には信仰が厚いとされ、都市化した高層ビルの屋上に赤い姿のお稲荷様を見ることがありますが、これが稲荷信仰の特性で「ケツネ」は日本民族の中で今でも生きているようです。

参考資料:「新編武蔵風土記稿」「稲荷信仰と宗教民俗(大森恵子)」「川崎の民間信仰(市民ミュージアム)」

シリーズ
教育の歩み 第1部

学校の誕生と成長(4)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆遣隋(唐)使の派遣と大宝律令◆

現物が残っていませんから、断言はできないのですが、おそらくは竹管や木管を使って、大勢の書記係が一斉に書き綴る作業が、来る日も来る日も延々と続けられ、こうして書き終えたものを、今度は校閲係りが間違いがないかどうかを読み合わせて確認し、合格した写本だけが、次々に各地方に送られていった。こうした気の遠くなるような作業が、大宝律令の発布と言う一つの事実の背後に隠されていたのです。

文字は成文法となって、支配の手段となり、裁きの道筋を示す役割を持ったのです。異国の教育機関の力を借りて、日本もようやく律令国家の看板を掲げることが出来るようになったのです。

◆教育機関の誕生◆

文字は支配者にとっての必要から生まれました。それ故、文字を自在に操れる者を養成することが、次代の支配者を育てるために欠かせないことになりました。六・三・三・四という教育制度に慣れた私たちは、学校というと、まず六年制の小学校という初等教育に始まり、やがて中等教育から高等教育へとというコースを、無意識のうちに頭の中に描いてしまいがちです。ところがこれは大きな間違いです。最初の学校は、次代の支配者の養成、即ちエリートの養成として始まるのですから、必要なはまずもって高等教育だったのです。

こうした事情で、教育機関は先ずは高等教育機関、今日でいう大学から先に作られていったのです。日本でも比叡山や高野山といった山岳道場は、学僧たちの学びの場、宗教哲学を学ぶ修行道場だったのです。ヨーロッパを例にとると、教会勢力(ローマ・カトリック)を基盤として造られた神学中心の大学と、都市型領主や都市の大ブルジョワを中心として創立された法学中心の大学という、二つの系統の存在が確認できます。

やがて、神学中心の前者も法学部を設置し、法学中心の后者も同じように神学部を併せ持つようになりますから、当時支配の手段として、最も影響力が大きかったのが、宗教と法であったことが分かります。「私は、キリスト降臨の奇跡は認めないが、民衆支配の奇跡は認める。」こう囁いたのは、ローマ教皇との和解を実現して、フランス国民の支持を固めることに成功したナポレオン・ボナパルトその人でした。西洋の大学は、まず神学と法学によって基礎を固めました。やがてそこに第3の学びとして、医学が加わることになります。

ところで、西洋中世の大学の起源は、近代の大学のように創立年月日を定めることが出来ません。創立記念日がはっきりしないのです。それは大学が、学生たちや教授たちの団体、西洋中世における独特の職能団体、ギルド(職能組合)として誕生したという由来を持っているからです。古くは、修道院や司教座聖堂に附属した学校があり、ここで高位聖職者になるための教育が行われていたのですが、次第に教会法が整備されるようになり、ローマ法に対する理解も深まってきたため、法律家・書記官・教師などが、夫々独立の職業分野であると、みなされるようになったのです。そこでは、実用一点張りではなく、真理の探究が尊ばれ、まさに高等教育機関と呼ぶに相応しい内実を備えるようになってゆきました。



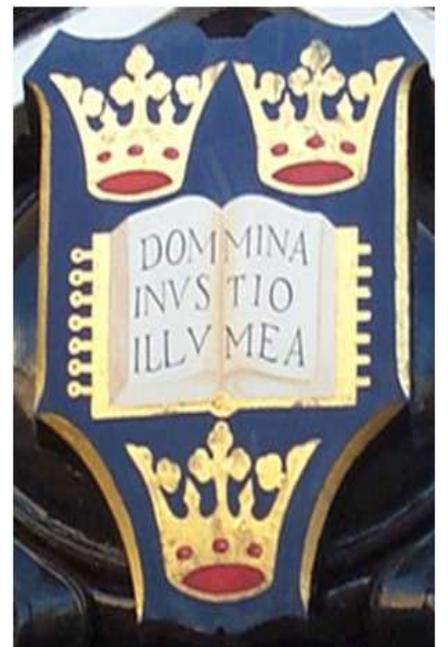
1350年頃のボローニャ大学の講義風景

パリ大学が、おそらく1150年前後に誕生し、それに前後してイタリアのボローニャ大学と、イギリスのオックスフォード大学が、さらにはフランスのモンペリエ大学などが誕生、やがてプラハ大学やビュルテンブルグ大学などが誕生するに至るのです。

こうした大学の一つ一つに、次々と学生や教師の団体(組合、ギルド)が生まれ、12世紀末から13世紀にかけて、国王から「団体」としての特許状を賦与されるに至ります。そんな中、ボローニャ大学は法学を中心とした構成を採り、ローマ法や教会法の権威を集めていった結果、

欧州各地に評判が広がり、各地から学生が集まるようになったのです。その結果学生のための寮や下宿が不足する事態となり、そこに眼をつけた市民たちは、学生の弱みにつけ込んで、頻繁に家賃の値上げを繰り返すようになったのです。困った学生たちは、団結こそ力なりと、学生団体(これがユニヴェルシテ、ユニヴァシティの語源になりました)を作って対抗、適正家賃(即ち最初の値上げ前の家賃)への値下げを要求して、ボローニャの都市当局との交渉に入りました。その席で学生団体は、「家賃の値下げを認めないのなら、ボローニャを引き払って他都市に移るぞ」と強硬姿勢を貫いたのです。

紙数が尽きましたので、結果がどうなったかは、次回に記します。(続く)



オックスフォード大学の紋章

ラテン語で「主は我が光」と記されている

現在の川崎市域は、その多くの地域が旧橘樹郡に属していましたが、麻生区の約 2/3、旧村名でいうところの万福寺・上麻生・下麻生・古沢・五力田・片平・栗木・黒川・王禅寺・早野・岡上は旧都筑郡に属していたことは、本誌第101号でお話したところですが、この麻生区の旧都筑郡地域は、古代都筑郡の北側にあたり、東側を橘樹郡、北側を多摩郡と境を接している郡境の地域で、図3のように、古代に都筑郡家(郡衙)跡とされる長者原遺跡(横浜市青葉区荏田西)と武蔵国府(東京都府中市)とを結んでいた道が通っていたと考えられています。麻生区の旧都筑郡地域は、多くの人や物資等が行き交う道が多く交わる交通の要衝の地であり、それを裏付けるように、これらの道沿いに古代の遺跡が多く発見されています。この道沿いに見られる古代の遺跡からは、数量的にはそれほど多くはありませんが、器の表面に墨で文字を書いた墨書土器が出土しています。これらの墨書土器の中には、ある共通点があることが近年明らかになってきました。こうした共通性をもった墨書土器が出土する遺跡の分布等を調べてみると、交通の要衝ということだけでなく、当時この地域がもっていた地域的・地理的な意味も見えてくるかもしれません。そこで、墨書土器が出土している遺跡の紹介をしつつ、そこから見えてくる麻生区内における旧都筑郡地域の古代の様子を想像してみたいと思います。(つづく)



図3 麻生区における古代の郡境(推定)と旧都筑郡地域の主な古代の遺跡

柿生郷土史料館催物案内 【入場無料】

第72回
カルチャーセミナー

東高根森林公園に眠る古代遺跡

柿生から溝の口行きの市バスにゆられて約30分で行ける、東高根森林公園。この公園には神奈川県史跡に選定された、古代の遺跡が眠っています。公園に眠る古代社会に、皆様をご案内します。

講師：小薬 一夫 氏 (市民ミュージアム主任学芸員)
 日時：1月28日(日) 午後1時30分～3時30分
 会場：柿生郷土史料館特別展示室



- 今後のカルチャーセミナー 午後1時30分より
- 3月25日(日) 「常安寺の歴史と魅力」 三輪 修三氏
 - 4月28日(土) 「中世の杉山神社の史料を考える」 中西 望介氏